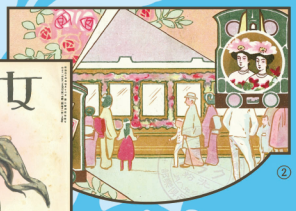
第17回企画展

コスメチックス広告

広告にみる大正ロマンと昭和モダン



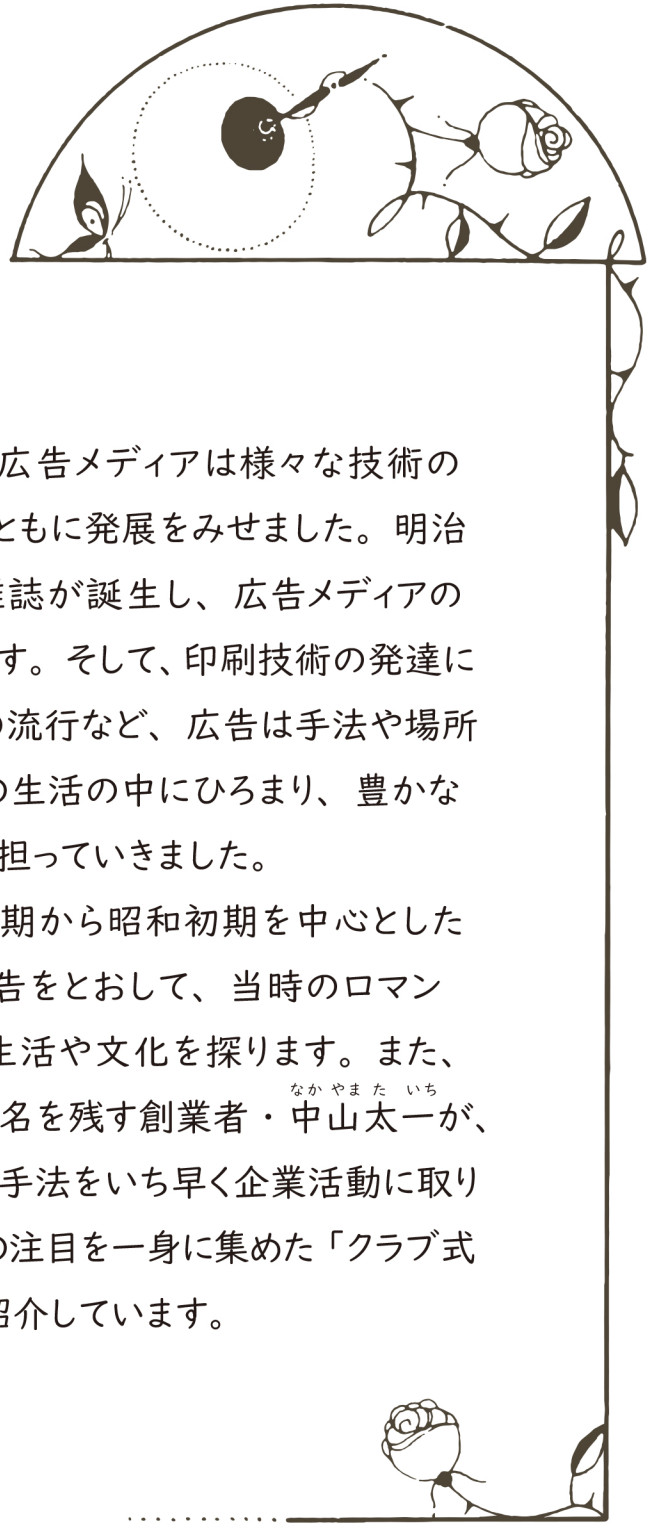
①雑誌広告『女性 二月号』第五巻・第二号（大正15年）プクトン社　②絵葉書「北海道汽車博覧会」（明治43年）　③雑誌表紙『女性 五月号』第一巻・第一号（大正11年）プクトン社　④絵葉書「ククダデー 富士登山記念」（大正後期～昭和初期）
③雑誌広告『赤い鳥 七月号』第十七巻・第一号（大正15年）赤い鳥社　⑤ポスター「朝のクラブ歯磨」（大正2年）⑦雑誌広告『演藝画報 四月号』第二十二年・第四号（昭和5年）演藝画報社　⑧絵葉書「熱見温泉のベンチ広告」（昭和初期）

2021年8月2日（月）～9月30日（木）

9:30～17:00（8/12、13、14、16、日祝日を除く）事前予約制

大阪市西区西本町2-6-11 1階 文化資料室　Osaka Metro 中央線「阿波座駅」1番出口すぐ

株式会社クラブコスメチックス



ごあいさつ

明治時代より、広告メディアは様々な技術の発達や都市形成とともに発展をみせました。明治時代には新聞や雑誌が誕生し、広告メディアの中心となっていきます。そして、印刷技術の発達による商業ポスターの流行など、広告は手法や場所も多様化して人々の生活の中にひろまり、豊かな都市文化の一端を担っていきました。

本展では、大正期から昭和初期を中心としたクラブ化粧品の広告をとおして、当時のロマンあふれるモダンな生活や文化を探ります。また、日本近代広告史に名を残す創業者・中山太一（なかやまたいち）が、当時先端の技術や手法をいち早く企業活動に取り入れ展開し、世間の注目を一身に集めた「クラブ式広告」もあわせて紹介しています。

第1章　時代を映すコスメチックス広告

明治末から昭和初期にかけ、日本では大量生産・大量消費型経済が発達しました。様々な技術の発達や都市形成とともに人々の生活は向上し、豊かな都市文化が花開いていきます。

明治時代には新聞や雑誌が登場し、広告メディアの中心となっていきました。さらに、印刷技術の発達により商業ポスターが流行します。また鉄道網の発達により、人々は観光旅行に出かけるようにもなりました。こうした人々の生活の様々な場面において、広告は多用な手法で顔をのぞかせ、存在の場をひろめていきました。これら広告、その背景より当時のロマンあふれるモダンな生活や文化を、うかがい知ることができます。

左上：新聞広告「写真入り広告」『東京読売新聞』（明治40年9月25日）
右上：新聞広告「いそっぷクラブ」『都新聞』（大正2年4月11日）
左中：新聞広告「鉄道式図解広告」『朝刊やまと新聞』（大正5年6月20日）
右下：写真「25歳頃の中山太一」（明治40年頃）

日本の新聞は日露戦争（1904-5）をきっかけに、政論新聞から情報の伝達が主体の報道新聞へと大きく方向転換した。人々はより迅速・正確・大量なニュースを求め、需要に応えた新聞が部数を伸ばしていった。また1890（明治23）年に写真製版が実用化され、新聞広告でも採用されるようになり、広告はひろがりをみせていく。

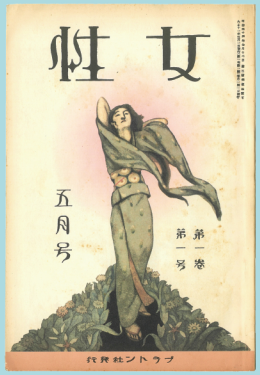
新聞

日本初の雑誌は1867（慶応3）年に柳川春三が創刊した『西洋雑誌』といわれている。明治以降の黎明期の雑誌は発行部数が少なく、大衆の啓蒙を目的としていた。1894（明治27）年の日清戦争を境に、マスメディアとして雑誌の発展が本格化する。商業雑誌が次々と誕生し、広告メディアとしての価値が急速に高まっていった。

雑誌

1900（明治33）年に義務教育授業料が廃止になり、就学率が95%まで上昇した。1884（明治17）年には日本初の婦人雑誌『女学新誌』が創刊している。黎明期の婦人雑誌では「良妻賢母」をおしひろめる内容であった。大正後期から昭和にかけて多くの大衆向け婦人誌が創刊し、読者層はひろまりをみせた。

婦人雑誌



日本に登場したのは19世紀末の明治後期といわれている。一般的に「広告画」「絵看板」と呼ばれていたものが、明治末に「ポスター」や「ポースター」と呼ばれるようになる。西洋、東洋問わず美人画ポスターは人気があった。1921（大正10）年に第一次世界大戦関連のポスター博覧会が開催された頃を境に、ひろく認知され存在を確立していく。

ポスター

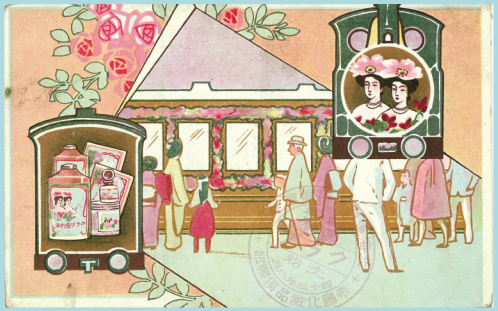
左上：雑誌広告「クラブ白粉」
『女学世界』第19巻 第7号（大正8年）博文館
右上：雑誌表紙『女性』第1巻 第1号（大正11年）プラトン社
復刻版 日本近代文学館『復刻 日本の雑誌』（昭和57年）講談社
右中：雑誌広告「クラブ歯磨」
『女性』第5巻 第2号（大正13年）プラトン社
左下：雑誌広告「クラブネリハミガキ」
『赤い鳥』第17巻 第1号（大正15年）赤い鳥社
右下：雑誌広告「クラブ白粉」
『歌劇』第138号（昭和6年）宝塚少女歌劇団

photo © Hironobu Iwamoto

北野恒富 ポスター「朝のクラブ歯磨」（大正2年）

1910(明治43)年に日本初飛行成功後、各地で飛行大会が開催され、民間飛行家が各地をまわり飛行を行った。飛行機を一目見ようと会場には多くの人が集った。中山太陽堂はその4ヶ月後の1911(明治44)年に会場で商品名入りの広告をつけた凧をあげたのをはじめ、機上から景品券を散布するなど、広告宣伝の場として活用した。

飛行大会



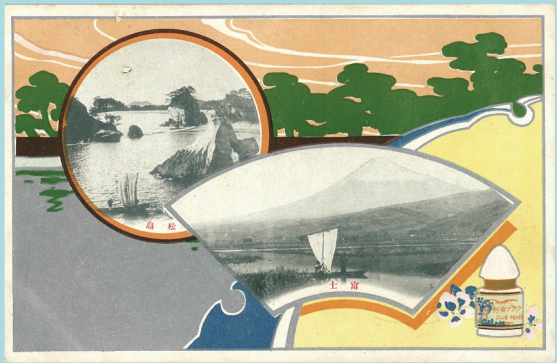
明治から大正期は博覧会の時代といわれ、様々な博覧会が全国各地で開催された。明治期は国策として商工業者を対象に高度な技術を公開する「文明の博覧会」だったが、大正期は主宰が地方自治体や民間企業に移り、物質的な豊かさを求める「文化の博覧会」となった。中山太陽堂は積極的に博覧会に参加し、各会場で人気を博した。

博覧会

右上：写真「松山飛行大会」(大正3年9月)
右中：写真「金沢飛行大会」(大正4年6月)
左中：絵葉書「クラブデー　富士登山記念絵葉書」(大正後期～昭和初期)
右下：絵葉書「北海道汽車博覧会」(明治43年)
左下：絵葉書「平和記念東京博覧会」(大正11年)

日本の鉄道は明治39(1906)年に鉄道国有法が成立し、ほぼ全国的な鉄道交通網が完成している。人々の移動距離はのび、それまで難しかった場所への旅行や観光を楽しむことが可能になった。

レジャー・観光



大正から昭和にかけての日本では、大衆娯楽として観劇が流行した。劇場の周りには飲食店やカフェやバーなどが軒並みを揃え、連日多くの人で賑わいをみせた。芝居や寄席など多くの娯楽が存在する中、活動写真(映画)の人気は群を抜き、大衆娯楽の中心的存在であった。

劇場・映画

右上：弁当包紙「英国皇太子来日記念」(昭和11年)
右中：観光リーフレット「鎌倉山」(昭和初期)
左中：絵葉書「富士　松島」(明治末)
右下：写真「中之島中央公会堂に寄贈した緞帳」(昭和12年寄贈)
左下：楽譜広告『宝塚少女歌劇楽譜集』第164号(昭和10年)
宝塚少女歌劇団

第２章第１節　クラブ式広告

「是れ近時廣告社會に流行する新語なり。太陽堂中山太一氏が其の特製クラブ洗粉を賣弘むる爲に採用したる斬新なる廣告意匠を称するものなり。」1908（明治41）年発行の雑誌『実業之日本』で、クラブ式広告について紹介されています。

太一は当時先端の技術を使った、目新しいものを積極的に企業活動に取り入れ、世間を驚かせ続けました。例えば、1913(大正2)年にクラブの文字を入れたアドバルーン(広告用風船)をあげたり、1922(大正11)年に放映された現存では日本最古と推察される、宣伝用アニメーションフィルムを作成しています。そして1960(昭和35)年には、日本の広告界における先駆者として電通の創業六十周年記念事業で、広告人功労者として顕彰もされています。

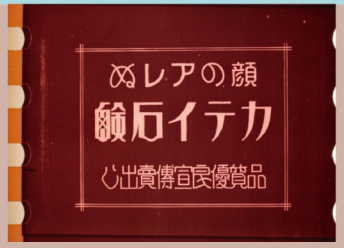
最新實務

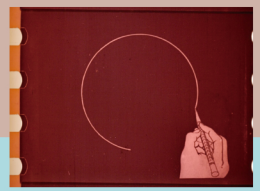
余は如何にしてクラブ洗粉を賣弘めたるか

中山太陽堂主　中山太一

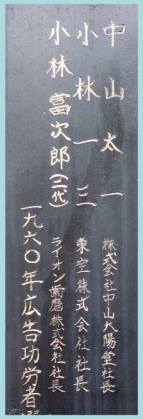
左：雑誌記事「最新実務　余は如何にしてクラブ洗粉を売弘めたるか」
『実業之日本』第11巻 第14号（明治41年）実業之日本社

中：宣伝用アニメーションフィルム『カテイ石鹸』（大正11年推察）
神戸映画資料館所蔵





下：広告功労者顕彰の広告記念像『平和の群像』（令和２年撮影）



第２章第２節　中山太陽堂 広告部

近代化を遂げる日本において、中山太一は広告の重要性を見い出しています。そして、クラブ式広告の影の立役者となる中山太陽堂の東京広告部を、1910(明治43)年に業界で先駆けて設置しました。太一はそれまでの間、現在でいうキャッチコピーである文案や企画、新聞社との交渉などを自身で行っており、広告への一途な思いが感じられます。

広告部の創設初期は、図案家の杉山壽栄男や沖田冲舟、版画家の織田一磨などが在籍し、雑誌『広告界』の主幹を務めた桑谷定逸を招きました。また、大正期に立ち上げた出版社、プラトン社に在籍していた図案家の山六郎や山名文夫もクラブ化粧品広告を手掛け、高いデザイン力とセンスをみせます。1919（大正8）年には洋画家の東郷青児が新聞の求人広告に応募し入社。約1ヶ月で退職しましたが、1933(昭和8)年には広告部顧問となり、広告だけでなく商品デザインも手がけました。

このようにして、クラブ化粧品の広告は豊富な人材の腕やセンスによって形作られ、クラブ化粧品の名を世にひろめていきました。

図案家の職業のかたわら考古学・民俗学を中心に研究活動を行った。小学校卒業後は大蔵省印刷局に就職。勤務のかたわら、東京高等工業学校附属補修学校図案科および製版科（夜学）に入学。卒業後は杉山図案所を構えた。中山太陽堂では大正初期の組織図に名があり、創業当初の広告にみることができる。

杉山壽栄男（すぎやますえお）

版画家。1911（明治44）年より中山太陽堂広告部に在籍。1912（明治45）年に新世界ルナパークが開業し、その中心にあった通天閣の天井部装飾をクラブ化粧品の広告として手がける。1914(大正3)年には退職して東京へ戻り、版画の創作を行う。中山太陽堂では広告部設置当初の頃より在籍していた。

織田一磨（おだかずま）

左上：杉山壽栄男　雑誌広告「クラブあらい粉」
『婦人世界』第1巻　第7号（明治39年）実業之日本社
右上：杉山壽栄男　雑誌広告「クラブ洗粉」
『女学世界』第9巻　第8号（明治42年）博文館
左下：織田一磨　雑誌広告「クラブおしろい」
『婦人世界』第7巻　第6号（明治45年）実業之日本社

中山太陽堂では、1915（大正4）年頃より手掛けた広告をみることができる。鉄道式図解広告を中心に多くの広告を残した。大正の終わりには中山太陽堂の理事を務めた。それ以前は、1885（明治18）年創業の化粧品会社・桃谷順天館で「傘美人」など広告を手掛けたと、創業者・桃谷政次郎氏の伝記に残されている。

沖田沖舟（おきたちゅうしゅう）

1919（大正8）年に京都高等工芸学校図案科卒業後、中山太陽堂に入社。新聞広告を手掛ける。1922（大正11）年のプラトン社の立ち上げ時に出向し、後に転籍。文芸誌『女性』のタイトルロゴを美麗な図案文字でデザインした。その他雑誌の表紙や扉絵、カットの制作、単行本の装幀も行った。

山六郎（やまろくろう）

竹下夢二やビアズリーに影響を受け絵画制作を始める。プラトン社の図案家募集の新聞広告を見て応募。1923（大正12）年に入社。出版誌『女性』『苦楽』の表紙、扉絵などを担当する。1928（昭和3）年にプラトン社活動停止にともない退職。1933（昭和8）年に東京支店の図案部嘱託として関係が復活する。

山名文夫（やまなあやお）

右上：沖田沖舟　雑誌広告「クラブ白粉」『婦人世界』第 13 巻 第 7 号（大正 7 年）実業之日本社　左中：山六郎　雑誌広告「プラトンインキ」『女性』第 2 巻 第 3 号（大正11年）プラトン社　右中：山六郎　雑誌広告「プラトン万年筆」『女性』第 2 巻 第 4 号（大正 11 年）プラトン社
左下：山名文夫　雑誌広告「プラトン万年筆」『女性』第 3 巻 第 1 号（大正12年）プラトン社　右下：山名文夫　新聞広告「クラブ白粉」『東京読売新聞』（昭和 8 年 2 月 4 日）

東京美術学校図案科卒業。中山太陽堂では大正末に東京支店の広告部に在籍していた。雑誌広告を中心に、昭和初期に至るまで手掛けた広告が確認できる。また、1931（昭和6）年まで日本郵船に在籍していたことが分かっている。その後、月刊保育絵本『キンダーブック』など、児童書の図解制作にながく関わった。

水谷仲吉（みずたになかきち）

洋画家。画壇・二科会で活動を行った。1919（大正8）年6月、新聞に掲載された中山太陽堂の図案家募集に応募。採用となるが、約1ヶ月後に退職した。1933（昭和8）年に広告部顧問として関係が復活。商品パッケージや劇場の緞帳、新聞や雑誌、屋外広告など、多岐にわたるデザインの制作を行った。

東郷青児（とうごうせいじ）

©SOMPO Museum of Art, 21014

その他

左上：水谷仲吉　雑誌広告「クラブ白粉」『演芸画報』第 21 年　第 8 号（昭和 2 年）演芸画報社
右上：水谷仲吉　雑誌広告「カテイ石鹸」『演芸画報』第 22 年　第 4 号（昭和 3 年）演芸画報社
右中：東郷青児　業界誌広告「クラブ練歯磨・クラブ美身クリーム」『小間物・化粧品業界年鑑』（昭和 9 年）東京小間物化粧品商報社
左下：不詳　雑誌広告「クラブ白粉」『演芸画報』第 8 年　第 7 号（大正 10 年）演芸倶楽部
中下：不詳　雑誌広告「クラブ白粉」『グラフィック』第 3 巻　第 4 号（昭和 3 年）大正通信社
右下：不詳　雑誌広告「クラブ練歯磨」『赤い鳥』第 21 巻 第 1 号（昭和 3 年）赤い鳥社

GLUB

THE 17 TH EXHIBITION

COSMETICS ADVERTISEMENT

2021

次回の企画展は

第18回企画展「モダンガール」（仮）

を予定しております